札幌学院大学図書館報

書林

第 67 号

2005 年４月９日　発行

変貌する大学図書館----------1p
自著紹介----------2p
Welcome to S.G.U. Library ----------8p
世界の図書館　ロンドンの図書館散策----------9p
私の薦める１冊----------11p
編集後記----------13

『変貌する図書館』

図書館長　新國　三千代

私は子供のころから図書館が好きだった。いつも本棚を眺めながら、「現実の世界に比べ、本の世界はなんて広大で豊かなんだろう」と感激していた。何しろ、図書館に行くと、遠い過去から未来まで、私達が生活している地球から宇宙まで、無生物から人類を含むあらゆる生物まで、時間と空間を超えて人類が蓄積してきた「知（知恵）」に出会うことができるのである。思うに、人類の最も偉大な発明は、“言葉（文字）や絵などの記号を用いて、個々人の頭に蓄えられた「知（知恵）」を頭の外に蓄えることができた”ことなのではなかろうか。その結果、各個の頭という空間的制限を超えて、他の人々と「知」を共有することが可能になった。そして、人類が蓄積してきた「知」を共有財産にすることができたのである。現在の人類の繁栄はその上に築かれたと言ってよい。子供の頃わくわくしながら探索に出かけた図書館は、その共有財産を収録した「知の宝庫」であったという訳である。

ところが、図書館が膨大な蔵書の館になってからは、欲しい本を探すことが困難になった。そんなときに、人類はまたまた大きな発明をした。それは、収録された文献の所在情報を電子化してデータベース化したことである。その結果、コンピュータを用いて本を探す（検索）ことが可能になった。今や、世界中の蔵書データベースがインターネットでつながり、図書館という物理的な空間を超えて、世界中で所蔵されている文献を検索することができる。その上、私達が実際に手に触れることができない、世界に一つしかない古い書物をインターネットで閲覧することもできる。最近の図書館には文字や絵などの平面的記号から音や映像などの立体的記号までもが収録されるようになってきている。勿論、それらをインターネットで閲覧することも可能である。本学の図書館もこれらの流れに遅れをとってはいない。２０数年前からこのような環境が順次整備されてきた。そして、今や本学の図書館は道内ではトップクラスという評価が定着している。

ところで、大学の図書館はこれだけで十分なのだろうか？　そもそも「知」の共有とは受動的に「知」を受け取るだけの行為を意味してはいない。友達と議論しながら問題の理解を深めたり、更なる「知」の探索へと誘うコミュニケーションが必要不可欠である。図書館にはこのような知的コミュニケーションを育てる場も必要である。本学の図書館はこの点でも進んでいる。静かに学習するスペースの他に、友達と会話をしながら学習ができる「グループ学習室」が整備されている。ゼミや小規模の講義などにも活用できそうである。これがうまく機能すれば、大学の図書館は「知」の探索ばかりでなく、「知」を生産、編集し、そして発信する場となっていくであろう。試してみたい気がする。

将来、私達が「図書館」と呼んでいる世界は、紙の館から電子媒体に記録された様々な知的財産を扱う館へと様変わりしていくかもしれない。そして、インターネットが館同士を結びつけることになる。とは言え、インターネットでカバーできる範囲はまだまだ限られている。すべての知的財産がインターネットで検索できるようになるにはかなりの時間を要する。私は、最近の学生達がインターネットで検索した結果を全てと早合点したり、実際に現物に当たることを軽視する傾向にあることを危惧している。と同時に、どのようにすれば膨大な「知の宝庫」から必要な情報を引き出すことができるのか、学生達はその方法を身につける必要もあると考えている。現物に当たる重要性と情報リテラシーの必要性を以前にも増して痛感する。本学では図書館のガイダンスと授業を連携させて、これらを学ぶ試みが始まっている。このように学生達の学びの環境はどんどん充実したものになってきている。しかし、図書館の利用は伸び悩み傾向にある。これは本学に限ったことではない。図書館を “ 多くの学生達が集う館 ” にすることは無理なのだろうか？　否、いくつかの大学ではそれを覆すような試みが行われている。発想の転換が必要なのである。目下のところ、それを模索する毎日である。

〜〜

自著紹介

『環境適応の経営管理〜低成長・グローバル化時代の日本的経営〜』

学文社　2004 年 1 月　児 玉 敏 一 著

本書は 1995 年に札幌学院大学選書として刊行された『日本的経営とオフィスマネジメント〜ホワイトカラー管理の形成と展開〜』北海道大学図書刊行会、の続編にあたるものである。前著が日本的経営の今後のあり方を、おもにアメリカのオフィスマネジメントとの比較を通じて分析したのに対し、本書では、低成長・グローバル化時代における日本的経営のあり方を、

企業の環境適応という視点から分析したものである。しかしながら前著が研究者を対象とした純粋な研究書であったのに対し、本書は経営学を学んだ経験のない一般の読者や大学院・学部学生にも理解しやすいよう経営学の基本知識・文献を盛り込むと同時に、筆者がこれまで行ってきた現地調査の内容をできる限り具体的に紹介することで経営管理の現場をイメージするよう心がけた。なお、本書のタイトルの環境適応という言葉は、一般的にイメージされるような単なる自然環境という意味だけでなく、社会環境を含めたより広い意味で使われている。

筆者が本書の中で最も強調したかったことは、特定の地域や国々、あるいは個々の企業の経営管理のあり方は、自らの企業の外的環境と内的環境を見きわめ、それらを効果的に生かせるような形で形成されるべきものであり、他の国々や他の企業のやり方をそのまま模倣する形のやり方は、たとえ短期的にはうまく機能したとしても必ず失敗するであろう、という点である。

序章では、低成長・グローバル化時代における経営管理の課題を企業の環境適応という視点から検討した。

第１部では、アメリカの管理論が企業の社会環境の変化にどのように対応しながら発展してきたのかを明らかにした。

第２部では、ドイツ、スウェーデン、フランスといったヨーロッパの国々の管理システムと、アジア諸国の管理システムの特徴を、それぞれの国々の社会・経済的背景を踏まえて分析した。

第３部では、地域と経営戦略という視点からアメリカ日系企業２社、と北海道のベンチャー企業3社の経営戦略について分析した。

終章では、わが国のこれまでの日本的管理システムの限界と課題を整理する中から低成長・グローバル化時代における日本的管理システムのあり方を展望した。

以上が本書の概要であるが、本書で言い尽くせなかった点が２点ある。そのうちの１点は、非営利組織の管理に関するものである。今日では行政組織やNPO、学校経営など非営利組織のマネジメント問題が経営学関係の学会においても大きなテーマの１つになっており、筆者もさまざまな非営利組織のマネジメント問題の研究を行っている。しかしながら紙幅の関係上今回はどうしてもこれを割愛せざるを得なかった。もう1点は企業内環境の中でも最も重要な問題の１つである人的資源の有効活用についてである。今日、多くの企業や組織が外的環境への適用を急ぐあまり、自らの組織の持つ人的資源の特性を考慮せず多くの企業がその内部から崩壊しつつある。これに対する筆者の見解は本書の随所で指摘してはいるものの、さらに一歩進めた体系的な記述を行うべきであったと思われる。これらについては今後の課題にしたいと考えている。

児 玉 敏 一（商学部：経営学）

〜〜〜

自著紹介

『「心のケア」を再考する』

現代書館 2003 年 3 月　井 上 芳 保 編著

日本社会臨床学会の第 9 回総会が 2001 年 6 月、札幌学院大学にて開催された。それを機にさっぽろ自由「遊」では同年 4 月から 6 月にかけて連続講座『「心のケア」を再考する』を実施した。本書はこの連続講座の記録を母体としている。総会実行委員長であり、かつ連続講座のコーディネーターでもあった私が編者の役回りを負うことになった。「心のケア」というと心理学者の出番という印象が一般に強いが、この連続講座では、心理学者のみならず、教育、福祉、医療、宗教など多分野の方々が協力して下さった。

「心のケアが必要」と最近は何かにつけて言われるが、そのように問題を個人の心理次元に還元していく風潮はどこかおかしい、それによって何が達成されているのか。本書は、日本社会臨床学会が重ねてきたこの切り口から考察するというスタンスを基本にしている。しかし本書はそれにとどまらず、「心のケア」に多くの人が引き寄せられていく現象の深層にあるものに踏み込み、明らかにしようとも試みている。

第Ⅰ部は、連続講座の記録を元にした原稿を収録した。第 1 章「いま、なぜ「心のケア」を問うのか」（小沢牧子）と第 2 章「「心」への関心の落とし穴」（伊藤進）は、心理学を専攻する研究者からのカウンセリング・ブームへの違和感の表明である。第 3 章「地域福祉のめざすものと「心のケア」」（林恭裕）は、社会福祉の仕事に携わってきた立場から「心のケア」より生活全般の支援が重要と説く。第 4 章「フ

ェミニスト・カウンセリングの現場から」（大嶋栄子）は、ソーシャルワーカーとしての病院勤務体験に基づき、患者の処遇におけるジェンダー差を浮き彫りにし、女性のための「心のケア」の必要性を訴える。第5章「医療現場における「心のケア」」（石谷邦彦）と第6章「看護の立場からみたホスピス・ケア」（石垣靖子）は、医療現場で医師、看護士としてそれぞれ仕事をする立場からこれまでの医療が「心のケア」を軽視してきたと批判している。第 7 章「豚汁と「心のケア」（舛田和麿）は、僧侶としての日常と共に阪神・淡路大震災の支援活動にあたった体験から被災者たちのホンネを紹介している。第 8 章「子ども臨床学から見えてくるもの」（加藤彰彦）は、小学校教員、日雇い労働者相談員などの経歴を持つ著者がご自身の子育て体験のことを振り返りながら子供の時に親がどう関わるかの重要性を説いている。

第Ⅱ部には、第9章「「脱魔術化」した世界の「再魔術化」とどう向き合うか」（山之内靖）、第10章「「ケア」についての考察」（花崎皋平）と私の終章「「心のケア」の幻想と現実をめぐって」を収めた。山之内論文は、「再魔術化」をキイワードにグローバリゼーションの進展という視点から現代を捉え直し、社会がマクドナルド化していく果てに待ち構えているものに警鐘を鳴らす。花崎論文は哲学者の立場から、キャロル・ギリガン『もう一つの声のなかに』などを取り上げ、現代氾濫している浅薄な「心のケア」とは別次元の「ケア」を再検討していく余地に言及している。拙稿は全体のまとめを試みると同時に「心のケア」の流行を支える社会意識の複層性を受け止め、分析する必要性を論じている。

確かに今はカウンセリングがブームだが、人々が本当に求めているのはカウンセリングそのものでは必ずしもないと私は考えている。例えば、消費社会がふんだんにもたらす物質的資源では満たされぬもの、本当に信頼できる人間関係の回復、自分の居場所や拠り所、他者ともっと出会いたい欲求など、多くのものが未分化のまま渾然とし、取り敢えずはカウンセリング・ブームとなって表現されているのでは。多様な立場からの主張を集めた一冊だが、「心のケア」の問題を一つの糸口に現代社会を捉え直そうとしている。その意味で図書館や書店では社会科学分野の棚に置かれるべき書物である。

井上芳保（社会情報学部：社会学）

〜〜

自著紹介

地域の歴史を学ぶ意味を考える

『北海道の歴史』　　山川出版社　2000 年９月　船津　功 共著

表．本州と北海道、沖縄の時代区分

紀元前	本　州	北海道	沖　縄
30,000 ―	先土器（旧石器）	先土器（旧石器）	先土器（旧石器）
9,000 ―			？
8,000 ―	縄　文		
		縄　文	
1000 ―			貝塚時代　前　期
西暦			
0 ―	弥　生		
200 ―		続縄文	貝塚時代　後　期
400 ―	古　墳		
			オホーツク
600 ―		擦　文	
	奈　良		
800 ―	平　安		
1,000 ―			古流球　グスク
	鎌　倉		
1,200 ―			古流球　第一尚氏
	室　町		古流球　第二尚氏前期
1,400 ―		アイヌ文化	
			古流球　第二尚氏後期
1,600 ―	安土・桃山		
	江　戸		
1,800 ―	明　治		
	大　正		
	昭　和		

近世琉球

（出典）白老民俗文化伝承保存財団『アイヌ文化の基礎知識』、
『沖縄の歴史』（山川出版社）、札幌学院大学人文学部『北海道と沖縄』より作成

1、歴史の基本的性格

表は本州と北海道、沖縄の歴史の時代区分を示したものである。旧石器時代の存在は共通しているが、新石器時代になるとすでに縄文時代で三者の違いが表われ、本州の弥生時代以降は三者の時代区分は大きく異なり、近代になると三者はまた同一の時代になる。

歴史学はある地域の社会構造とその変遷を研究する学問である。社会はその地域の自然環境に人間が力を加えることによって構成される。自然条件でいえば本州は温帯、北海道は亜寒帯、沖縄は亜熱帯に属している。人間の力とは利器（石器や鉄器など）と組織（集団や国家など）である。歴史の時代区分は旧石器、新石器など、大きく利器で区分され、その上で平安、鎌倉、室町など政権によって分けられている。利器が優れ、政権の力が強くなるほど自然に加わる力は大きくなり社会の変化は激しく、そして早くなる。現代に近づくほど時代区分が短くなり、時間の経過が早くなり、人々が忙しくなるのはこのためである。

2、北海道史の時代区分

北海道と沖縄の歴史は、本州の歴史＝普通にいわれている日本史とは異なる側面がある。本州の歴史では弥生時代に中国大陸より水田稲作と鉄器が入ったが、北海道には稲作は適さず、このため続縄文、擦文、オホーツクという独自の文化が形成された。また、本州の和人にたいして北海道にはアイヌの人々が生活していた。蝦夷地とは蝦夷の人達の土地という意味である。

鎌倉時代末期から和人の蝦夷地進出が始まり、江戸時代初めに道南に松前藩が成立する。蝦夷地では米作が困難だったので、松前藩はアイヌの人々の物産と本州の米を中心とする物資との交易権を独占することによって成り立っていた。明治になり近代的中央集権国家・国民国家を形成するため日本は、蝦夷地を北海道と改称し、アイヌの人々に和人への同化を強要し、本州からの移民と国家財政の巨大な投資による開拓を進めた。

同様のことは、南の沖縄でも行われた。沖縄は琉球処分の名で日本に編入され、沖縄の人々も本土化させられていった。こうして明治以降の近代･資本主義になると北海道も沖縄も本州と同じ時代区分になるのである。

3、北海道史・地域史を学ぶ意味

以上、北海道、沖縄と本州の時代区分の相違と基本的な特徴について触れた。歴史とは時間による縦の変化だけではなく、地域による横の相違があり両者の交接点として史実が構成されていることが分かる。北海道史という地域の歴史を学ぶ意味の一つはここにあるだろう。「歴史とは過去と現在の対話である」といわれる。現代の視点で過去の史実をとらえて歴史を語り、書いていこうということである。『北海道の歴史』も地域に生きる現代の北海道民の立場で記述されている。

再び表をみてほしい。北海道のアイヌ文化に対応する沖縄の歴史はグスク（沖縄の石造りの城のこと）、尚氏という独自の時代区分が行われている。沖縄では、この段階で統一的な政権が存在していた。これに対して、アイヌの人々は１７世紀後半のシャクシャインの戦いの段階でもいくつかの部族的集団にとどまっていた。アイヌの歴史をアイヌ社会を主体として区分し名付ける（例えば、安土・桃山、江戸、さらに元禄、文化・文政など）には、現在の北海道史の学問的蓄積ではいまだ困難だといえる。『北海道の歴史』でも、日本史の一般的な原始・古代、中世、近世、近代、現代の時代区分に依って執筆せざるを得なかった。

地域の歴史としての北海道史は、日本史の一般的・普遍的な流れと北海道固有の状態・独自の事情との相互交流と影響とによって成り立っている。近代人としての我々は全体と個人との関係、全体的・普遍的な中で自分を相対化し、自省しながら、自己の独自性･個性を発揮していかなけれ

ばならない。自覚された個人によって構成されている組織はより良い方向に進むようである。蝦夷地・北海道に生活してきた人々もまた、個人として真剣に、組織を作り、関係しながら生きてきたことを北海道史から知ることが出来る。大学生としてエゴに陥いらぬ自我の確立が求められている学生諸君。『北海道の歴史』を播（ひもと）き、日本史の普遍性との関連で北海道独自の歴史を具体的な史実と道民の姿をとおして学んでほしい。

4、『北海道の歴史』と『アイヌの歴史』

『北海道の歴史』は歴史学関係の出版社として定評のある山川出版社の県史シリーズの１巻として2000 年に刊行された。北海道史の通史として専門教養書として、大学・市民講座･グループ学習等のテキストとして各種の図書館必備の本として評価されている。地域の歴史を見直そうとする北海道民、北海道の歴史を知ろうとする本州方面の人々､北海道と沖縄を含めた日本史の再構築を目指している研究者等に、幸いにも好評をもってむかえられ、すでに４刷、1 万 2,000 冊が出版されている。増刷のたびに修訂正、加筆を行っているので各刷本には小異がある。最新刷の４刷、2005 年版での購読をおすすめしたい。

『北海道の歴史』の姉妹編として『アイヌの歴史』が『北海道の歴史』の 4 名の共著者により同じ山川出版社より 2005 年度中に刊行予定である。執筆者 4 名ともアイヌ語を修得しているわけではないし、先住民族のアイヌを圧迫し差別した歴史を有する和人である。アイヌ語は固有の文字を持っていなかったので、アイヌの状況はひとつには日本語の文献資料として残されている。日本史は日本人が書くのが一番良い、と同じ論理でアイヌ史はアイヌの人々が執筆した方が良いとも考えられる。しかし、ある民族がその民族の歴史を全て明らかに出来るわけでもないし、外の人からみた民族の歴史の位置付けも、また必要なことである。日本人がアメリカ史やイギリス史を学び、書く理由もここにある。前述の全体と個人、普遍性と個別性の議論を思い出してほしい。絶対性＝完全な歴史書などはなく、相対性＝真面目ではあるが不完全な歴史書をより完全な方向性で積み重ねて、より良い歴史書を作り続けていくしかないのである。これが人文･社会科学の基本的な方法論である。『北海道の歴史』はかかる立場で書かれ、『アイヌの歴史』はアイヌ史のひとつの試みとして、和人としての自己をみつめ直しながら、私の好きな言葉「学問的緊張感」を持して執筆されようとしている。

現状では評価されている北海道史の 1 冊の本として、地域の歴史を知り、自分の生き方を考えてみるひとつの機会として『北海道の歴史』を読んでほしいし、『アイヌの歴史』の出版に期待してほしい。

船津　功（人文学部：日本近代史）

〜〜

Welcome to S.G.U. Library

今回は人文学部英語英米文学科３年 小田淑恵さんにご登場いただきました。

○ 小田淑恵さんは身体が不自由で、車椅子生活を余儀なくされていますが、明るく充実したキャンパスライフを送っています。「将来は自宅で英語塾を開きたい」という希望をもって本学の英語英米文学科に入学したといいます。

「まだまだ実力が不足しているのでかなり先のことになると思いますが･････」と少々恥ずかし気におっしゃっています。

○ デイズニー映画が大好きで、その影響もあって英語に興味を持ったそうです。また、英語圏の国の文化、更には外国のホームページにも関心があったので、それらを勉強したいと考えて本学の英語英米文学科に入学したとおっしゃっています。

○ 図書館では主に第 1 閲覧室やラウンジを利用しているそうですが、明るく開放的で、落ち着くので好きですといいます。

○ 時々利用する第 3 閲覧室は、とても静かで勉強するにはとてもよい環境と思っていますと利用によって区別されている様子です。

○ 図書館では、アメリカやイギリスの歴史や文化に関するレポートやテストのために図書を借りる事が多いとのことですが、図書館を利用していて不便を感じている点についてお聞きしますと、「不便とまではいかないのですが、カウンターが高く、図書の貸出や返却の時、職員に図書を渡すのが大変なので、低いところもあるともっと便利かなと思います。」とおっしゃる。

（※図書館のバリアフリー化については、現在検討中であることを説明する。）

○ 勉強の合間には、幼い頃からイラストを描くのが好きで、特に最近はパソコンを使ってイラストを描くことにはまっていますと笑っていう。

○ 最近読んだ図書で面白いと思ったのは、貫井徳郎さんの「プリズム」だそうです。ミステリーで、様々な視点から犯人にせまっていき、最後には意外な結末が待っていて面白かったとおっしゃる。

○ 最後に図書館あるいは職員に対して要望することはないかといいますと、即座に「特にありません。自分で取りにいくことができない場合、お願いするとみなさん、快く持ってきてくださるのでいつも感謝しています」ということでした。

〜〜〜

＜世界の図書館＞

『ロンドンの図書館散策』

経済学部　山 田 昭 夫

私の海外研修は図書館めぐりの旅であった。そこで、頻繁に利用させていただいた図書館をいくつか紹介したい。

１）ベースキャンプとしての歴史調査研究所(Institute of Historical Research=IHR)

ＩＨＲは私の受入れ機関であるが、ロンドン大学における人文・社会科学系８研究所の連合体である高度研究学院(The School of Advanced Study=SAS)の構成メンバーであり、イギリスにおける主要な歴史研究センターのひとつである。その場所は大英博物館(British Museum)の北隣にあるロンドン大学のセンターSenate House の中にある。

IHR はいくつかの特徴ある活動をしている。第一は歴史をさまざまな視点(国と地域、時代、国際関係、文化と思想、政治、宗教、軍事、ジェンダー等)から考察するために多種多様なセミナーを日常的に開催し、しかも年に数回総合的なテーマを研究する国際的な歴史会議を開催している点にある。私が滞在した１年間では、“ Wealth and Poverty ” , “ The Great House ” , “ Guilds:London…England…Europe… ” 等がテーマであった。IHR は世界中の歴史研究者の出会いの場にもなっていたのである。第二は教育機関としてのものである。IHR は大学院課程のため３つの調査センター(Centre for Metropolitan History,Contemporary British History,Victorian County History)を持っているだけでなく、他大学の院生あるいは外国の研究者への短期訓練コースをも開設している。

さて問題は図書館である。書庫が独立してあるのではなく、研究所の廊下・各部屋の壁がすべて書棚になり、全体として図書館なのである。＜研究所付属図書館＞ではなく、＜図書館付属研究所＞あるいは＜図書館の中の研究所＞なのである。図書館の蔵書は印刷された第一次資料、伝記、アーカイブス・ガイド等からなるひとつのレファレンス・コレクションであり、図書館の機能は基本的にレファレンスに限定されているのである。利用者はここで自分の文献リストを点検し、どこの図書館に所蔵されているかを調査し，そこに出かけていくのである。だから、IHR の図書館は歴史研究のためのベースキャンプなのである。私もそんな形で利用した。

２）ロンドン大学図書館と LSE 図書館

印刷・出版された資料は、ロンドン大学図書館と LSE 図書館とを集中的に利用した。ロンドン大学図書館は IHR と同じ建物の中にあり、非常に便利であった。

特にゴールドスミス・ライブラリーに代表される歴史コレクションは有名である。古文書室の薄暗い

静かな空間でコピー不可の資料を手書きするとき、あるいは申し込んでから資料が出てくるまで４日もかかったとき，イギリスの空間と時間の流れとをいやおうなしに感じさせられた図書館であった。２００４年秋にロンドン大学の新図書館が運用開始されるとのこと、どんな変化が起きるか楽しみである。

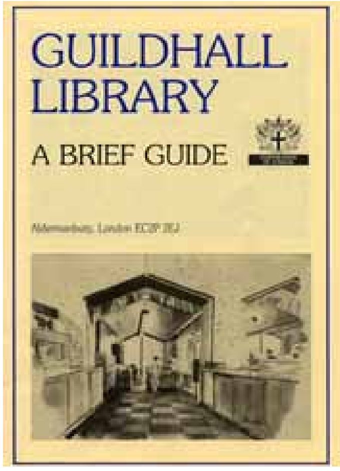
LSE 図書館はロンドン大学図書館から南西に徒歩１５分くらいのところにあり、坂道を道なりに下っていくとたどり着ける。それが British Library of Political and Economic Science である。この図書館の特徴は、＜学習図書館＞と＜研究図書館＞とをうまく融合したところにある。受付で手続きを済ませると目の前にリフトと螺旋状の階段がある。この階段を上っていくと各階ごとの Main Collection の書棚が並び、その後ろに学習用のスペースが配置されている。Main Collection は誰でも自由に利用できるのだが、日本にない１９世紀末の雑誌や書物がごく普通に配架されている。さらに、研究資料となるパンフレット類の所蔵がこの図書館の特徴でもあるが、それはサービス・カウンターで受け取り、図書館内で自由に利用できる。アーカイブスおよびそれに関連した貴重書だけは特別の読書室で読むことになっている。４００万以上といわれている資料を比較的自由に利用できる点で、外部の研究者には非常にありがたい図書館であった。

３）ギルドホール・ライブラリーとナショナル・アーカイブス

私の研究分野では、印刷・公刊された資料だけでなく、マニュスクリプトを利用することが普通になっている。そこで私も業界団体や官庁等の議事録に代表される未公刊資料を求めていくつかの図書館に通ったが、とくにギルドホール・ライブラリー（Guildhall Library）とナショナル・アーカイブス（National Archives）に足繁く通った。

ギルドホールは地下鉄のバンク(Bank)とセント・ポール(St.Paul)との中間にある。そのマニュスクリプト部門は１１世紀以降のロンドン市の税、不動産、救貧法、学校、教区等の未公刊資料だけでなく、シティ(The City)に関連する種々の業界団体および企業のビジネス・コレクションをも所蔵している。具体的には、ロンドン証券取引所、ロンドン商業会議所、イギリス銀行協会、外債保有者協会、さらにストックブローカー、マーチャントバンカー、保険、海運等の企業資料であるが、それらはシティ分析の宝庫ともいえるものである。

ナショナル・アーカイブスはパブリック・レコード・オフィス(Public Record Office)を改組したものであるが、キュウ・ガーデン(Kew Garden)の静かな住宅街のはずれにあるモダンな建物であった。ここの資料は大部分がイギリス政府の官僚機構が政策形成に使用した内部資料であり、財務省(T),内務省(HO),外務省(FO),という具合に各省庁ごとに分類され、コンピュータ管理されている。利用者は、登録をして利用者カードを入手すれば、それを使ってコンピュータ端末に座席番号と資料番号を入力すると、２０分くらいで必要な資料を手にすることができるシステムになっている。非常に効率的にできている。ただ監視カメラと監視員の巡回のもとに１００年前の資料を手にするとき、さらに利用した資料の個人リストが端末スクリーンに出てきたとき、イギリス官僚制の空恐ろしさを感じさせられた。これもイギリスなのである。



一年間で１０数館の図書館を利用したが、イギリスの図書館は地域図書館、大学図書館、全国レベルの資料館等おのおのが独自性を持っており、それをうまく使いこなせれば無限の可能性を引き出せるだろう。

〜〜〜

私の薦める１冊

『魔術はささやく』を読んで

人文学部臨床心理学科　４年　高 橋 智 大

『魔術はささやく』新潮文庫　宮部みゆき著　1993 年１月刊
1989 年日本推理サスペンス大賞

　私が推薦する本は『魔術はささやく』である。この作品は第２回日本推理サスペンス大賞受賞作品であり、宮部みゆきさんの出世作品である。私は元々小説を読むことはあまり好きではないが、推理やミステリー小説は大好きで、中学時代には赤川次郎さんの「三毛猫ホームズ」シリーズは１作目から２４作目まで読んだことがある。しかし、高校に入ってからは小説を読む習慣が無くなり、面倒臭く感じるほどになった。そんな時、映画「クロスファイア」が巷で公開されて、宮部みゆきさんの名前を知ることになった。

　実際に私が宮部みゆきさんの作品を読んだのは高校三年生の夏である。夏休みの読書感想文のために学校から渡された新潮文庫の作品紹介本に『魔術はささやく』があった。宮部みゆきさんの作品は一度読んでみたかったが、ミステリー小説はそれまで読んだことがなく、内容が難しいのではないかと思い、「初めての人には『魔術はささやく』がおすすめ」と書いてあったのでさっそく読んでみた。

　普通私は、１冊の小説を読むのに１週間以上はかかるのに、『魔術はささやく』は今まで感じたことがないスリリングな展開と思いもかけないどんでん返しにはまってしまい、たったの３日で読み終えてしまった。

　本作品は、一人の女性がマンションの屋上から飛び降り自殺をするところから始まり、二人目、三人目と次々と女性が謎の死を遂げる不可解な事件が発生し、死んだ女性達には接点がなく、三人目の女性

はタクシーに飛び込んできて、はねてしまったタクシーの運転手が主人公・守の叔父であり、叔父は業務上過失致死の容疑で拘留されてしまう。主人公の守は叔父の無実を晴らすために動き出す。事件に巻き込まれてしまう主人公の守や主人公と同居する叔父や叔母、従姉妹の真紀は非常に災難であり、読んでいて不思議とすんなり感情移入してしまう。こんなにも感情移入してしまう作品は初めてだったので純粋に作品の世界に入ることができた。

そして、叔父の無実を晴らすために、守は三人目に死亡した女性の家に特技である「開錠術」で侵入して女性の身辺を捜査して行くうちに、三人の女性の自殺に不信感を抱きながら、次第に何者かによって仕組まれた殺人事件の真相へと迫って行くことになり、推理小説の要素もあり、「誰が真犯人なのか」と推理する楽しみもある。

この不可解な女性の死に関する事件と並行して、守の過去についても描かれていく。守の父は１２年前に失踪しており、守は父に関しても真相に迫って行くのだが、どちらもスピード感がすごい。見ている方が疲れない位の丁度よさである。物語には多くの登場人物が出てきて、数々の事件や出来事が起こるのだが、これほどまで登場人物が多い作品も初めて最初は整理するのに戸惑ったが、すぐに慣れることができ、難なくすっきりと飲み込むことができた。これは、守と同じ思春期であり、その年頃なりに抱える悩みを嫌味なく書かれており、宮部みゆきさんの文章と構成の巧みのなせる技なのだと感じた。

連続女性怪死事件の方では、途中に叔父の無実を証明して守に接近してきた謎の男、吉武と共に、守が「何者」かに操られた従姉妹の真紀の証言を元に、狙われている四人目の女性を探し出し、女性を無事救出し、遂に守と真犯人との一騎打ちになる。ここが一番の見せ場であると共に、真犯人の意外性に誰もが驚くと思う。特に、真犯人の犯行の手口が社会問題を道具としているところが非常にリアルで読み応えがあった。事件が解決して終わりかと思ってエピローグに進むと、最後の最後で守と謎の男吉武との関係、父親の失踪が明らかになり、更に大どんでん返しがあり、最後まで驚き、楽しませてくれる。

読んでいて、激しくスリリングなシーンもあり、家族や友人とほのぼのするシーンもあり、シーンごとに読んでいる方も気持ちを切り替えて感情移入することができた。まだ守は１６歳なのに、つらい過去や境遇にもめげない姿勢が全然嫌味に感じなく、一人事件に立ち向かって行く守は男から見ても非常にかっこいいとも思った。

このように、本作品はさまざまな出来事が絡み合いながらも、実は繋がっていて、たくさんの人間関係や出来事が非常に多く出てくるのに、きちんと整理することができるのが、読んでいて非常に心地よかった。確かに、「ミステリー小説」というジャンルの中には入るのかもしれないが、ただのミステリーではなく、家族とは、友情とは何か、社会問題に対しても非常に真っ直ぐ書かれているので、私は単に「ミステリー小説」と言う風にくくるのは惜しいと思う。

癖がなく、次の展開が気になってしょうがないと言った心地で読み飛ばしてしまうと共に、エンディングが綺麗事ではなく、しっかりとして納得のいくものなので、読み終えた後非常にすっきりして、すがすがしい気持ちになれる。家族愛や友情、社会問題を痛感する作品である。

私の薦める１冊

『メイド・イン・ロンドン』 熊川 哲也著　文芸春秋社　1998 年 12 月

法学部法律学科　3年　吉 田 真 佑

　私のお薦めする本は、今や世界的に有名なバレエダンサー、熊川哲也さんの著作です。日本でも数多くのファンをもつ熊川哲也さんの初めての自伝であり、以前から読みたいと思っていました。
というのも、私も４歳から現在までクラシックバレエを習っているのと、ロンドン旅行に行ったことがあり、１９９５年に彼が入団していたロイヤルバレエ札幌公演に出演した経験があり、とても興味がありました。
　本の中には、彼のロイヤルバレエ時代の写真、レッスン風景、プライベート、ロイヤルオペラハウスの写真があり、目をひく写真がたくさんあります。
普段読んでいる以上に面白く、ページがどんどんめくられていきます。
 この本は８章にわかれており、熊川哲也のプロ生活１０年の節目に英国ロイヤルバレエ団のプリンシパルの座を捨て、新たな１歩を踏み出した熊川哲也自らの生い立ち、恋愛、そして今回の退団までのすべてを綴っています。彼は、１０歳でバレエをはじめ、１５歳で単身渡英し、わずか５年でトップダンサーとなりました。この本では、彼の舞台に対する真剣さ、努力、成功などたくさん書かれています。
 自分も舞台に立つものとして、共感できることが多々あります。
舞台でのスポットライトをあびた瞬間や、仲間とひとつのものを作り上げる充実感、観客からの拍手は忘れることは出来ないし、家族の支えなどもあっての事だと私も彼も思っているでしょう。
 やんちゃだった少年時代から、退団までことこまかく書かれているので読んでいておもしろいです。
 今回は紹介ということで、詳しくは紹介できませんが、読んでいてきっと為になると思います。もう彼のことは、知っていると思いますが、好きな人も、そうでない人も一度手にとって読んでみてはいかがでしょうか？きっとなにか得るものはあると思います。
是非読んでもらいたい一冊です。

〜〜

編集後記

　新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。
例年にない大雪に見舞われた今冬も、最近は雪解けが進み、日差しもやわらかく、頬にあたる風も心地よくなってきました。早春の息吹きが感じられると同時にキャンパス内は、いきいきと躍動感にあふれています。そのような中、図書館報「書林 第 67 号」を発行することができましたことをこのうえない喜びといたします。
　図書館報「書林」は、WEB 版になってから、年に 2 回の発行をベースにしつつすでに 4 回を数え、2 年目の春を迎えることができました。これもひとえに、年度末や新年度準備のためご多用中にもかかわらず、ご協力下さいました教員の方々をはじめ、学生の皆さんのお陰と感謝申し上げる次第です。

〜〜〜

札幌学院大学図書館報「書林」第 67 号について

＊掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります。

＊記事・写真の無断転載は禁止します。

＊紹介図書の写真については、各出版社から掲載許諾を頂いております。

　許諾を頂きました各出版社の皆様には心からお礼申し上げます。